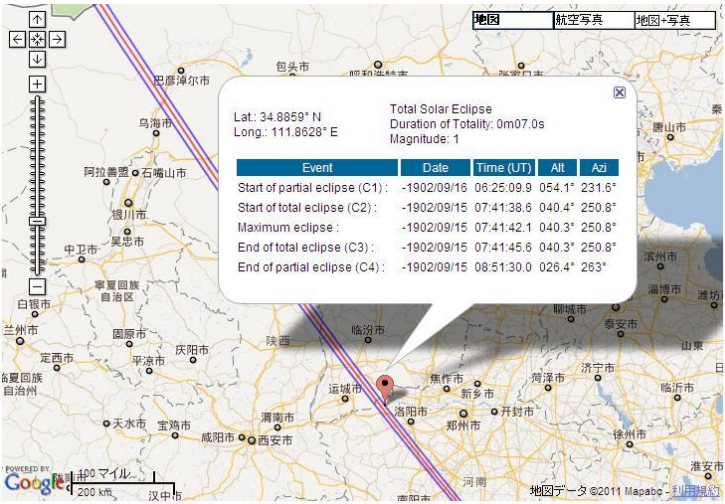
日食こぼれ話

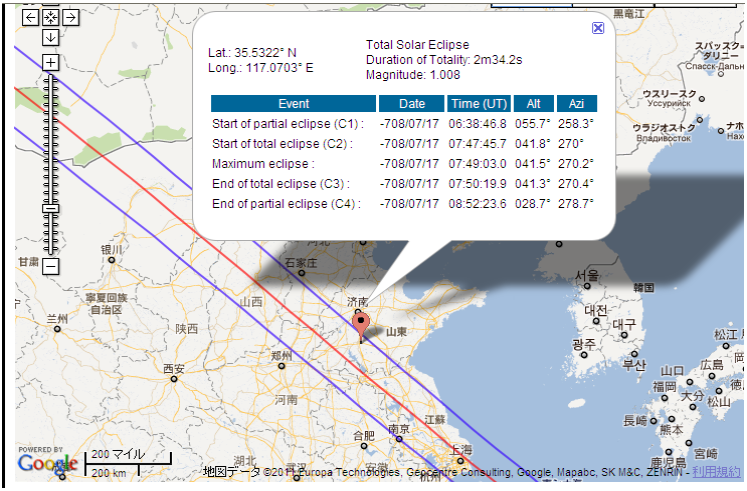
～予報をさぼった天文官から謝罪した皇帝まで

中国では

母なる恵みの太陽が白昼消えてしまう皆既日食は古代の人々にとって驚異であり脅威でした。古代中国では天子は天の声に従って国を治めなければならないので，天変は詳しく調べられ，記録もたくさん残っています。世界で最も古い日食伝承として，夏王朝第４代仲康の時代に義氏と和氏という天文官が酒色におぼれて日食予報をサボり，暦を乱したのでクビ（罷免ではなく死刑）になったとか，恐ろしい話が伝わっています。天文官たるもの，命がけで計算して予報を出さねばならず，星空を楽しむ余裕はなかったようですね。この日食の日付は，詳しすぎてかえってアヤシイですが『書経』では**季秋月朔**と，また『竹書紀年』では**帝仲康五年秋九月庚戌朔**となっているそうです[8]。太陰暦で秋は七月八月九月で季秋とは九月のことです。その日付の特定研究はすでに紀元前の時代から行われていて，これまで多数の候補年が挙がっています。現在，私たちは「紀元前 20 世紀，19 世紀の秋に華北で見えた皆既日食・金環日食」は容易に探すことができます。日食ソフト Emapwin を用いると，BC1961 年 10 月 26 日と BC1903 年 9 月 15 日が見つかり，どちらも皆既食です。それらの日の干支はそれぞれ庚子と癸亥で，記載とは合わず、また夏王朝の存在自体が未確認ですが。

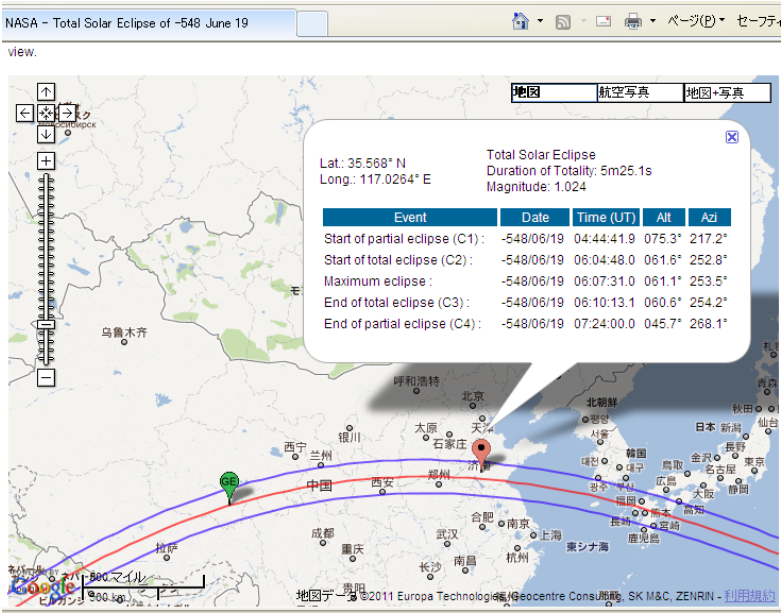


日食記事において「既」という文字があれば 100%とはいきませんが，皆既食が起こったことを表し，部分食と区別しています。孔子（BC551 - BC479）が編纂したといわれる歴史書『春秋』は BC772 年から BC481 年までが記されていて，その中には日食記事が 30 件以上もあります[8]。



「桓公三年，秋七月壬辰，日有蝕之既」　　BC709 年 7 月 17 日　図 1
「僖公五年，九月戊申朔，日有蝕之」　　BC655 年 8 月 19 日
「成公十有六年，六月丙寅朔，日有蝕之」　　BC575 年 5 月 9 日
「襄公二十有四年，秋七月甲子，日有蝕之既」BC549 年 6 月 19 日　図 2

これらは実際に孔子が生まれ，弟子たちと暮らしていた魯の国で見られた

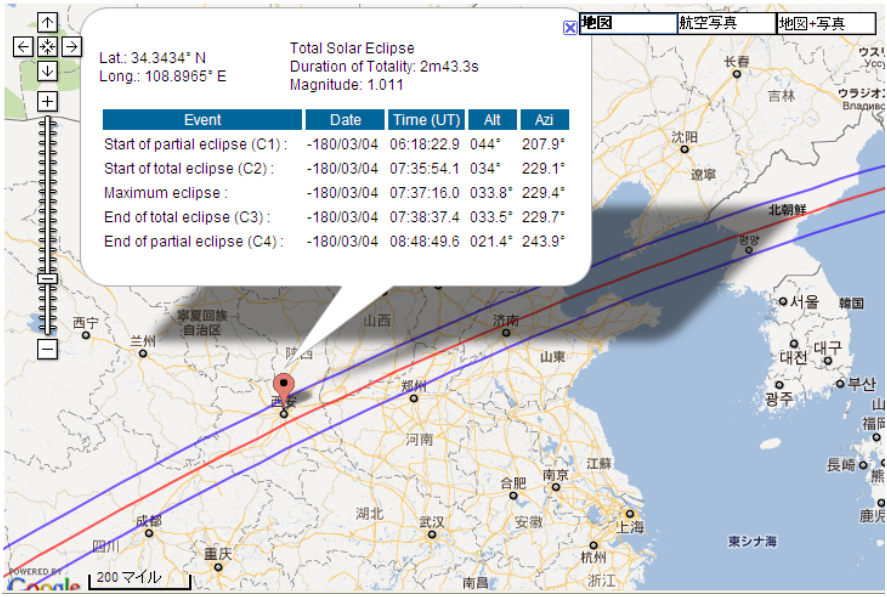


皆既日食です。4 番目の日食は彼が 2 歳の時、皆既は 5 分半も続いたそうです。

日食が起こると皇帝自ら公文書を出し、自分の誤りを認めることがあります。『史記』には漢の高祖の皇后で悪名高き呂后でさえ七年正月己丑晦に起こった日食で昼間暗くなったのは自分のせいと言ったと記されています。自己批判で有名なのは、呂后没後第 5 代皇帝となった文帝（孝文帝：在位 BC180－BC157）の場合でしょう。二年十一月晦に日食が起ったため文帝は「天下治乱の責任は朕ひとりにあり。上三光（日月星）の明をわずらわすはわが不徳のなすところ！」，さらに民に「自分に直言極諫してくれる賢者を推薦してほしい。」という詔を出したと記されています。呂

后が亡くなり文帝が即位する BC180 年の前後 5 年間で長安や洛陽で観られる大日食を調べてみると BC181 年 3 月 4 日の皆既日食が見つかります（図 3）。しかもこの日の干支は己丑ですから、これが呂后の日食に当るようです。

しかしその後は大日食はなく文帝の日食の候補としては BC178 年 12 月 22 日（旧暦では十一月）の部分食しかありません。マレーシア・フィリッ



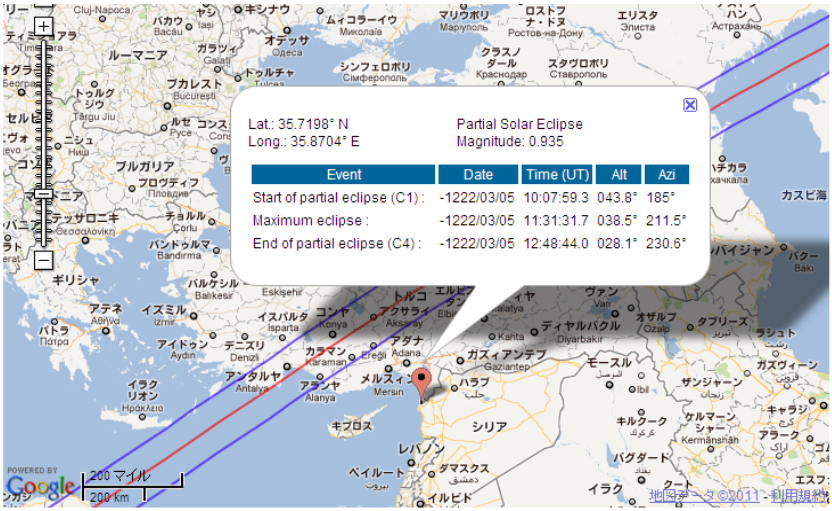
ピンでは金環食が見られましたが、中国では 3 割しか欠けず，ほとんどの人には気づかれずに終わってしまったはずです。しかしそんな些細なことでも「わが不徳のいたすところ」と嘆くほど文帝は名君だったと讃える挿話ではないでしょうか。漢の文帝は税の軽減，刑罰の緩和，母親への孝行などを行った特別な名君で，素直に「自分が悪かった。」と認めました。夏の仲康は「ワシは悪くない，悪いのはこいつだ！」ということで，天文官をクビにしましたが。

中東では

　世界最古(？)の日食記録はトルコとシリアの境あたりにあった都市国家ウガリッドで見つかった粘土板に記されている

新月の日は汚され、火星を供に沈んだ。

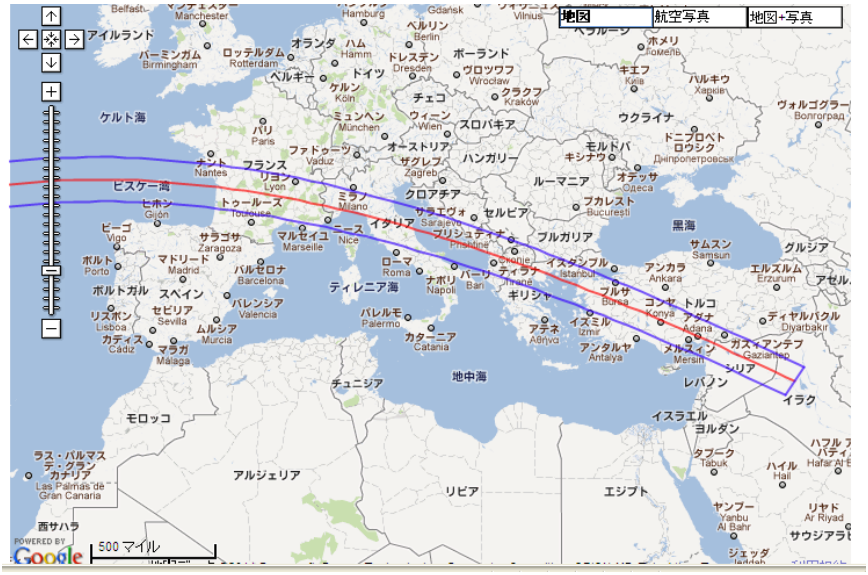
という記事だそうです。火星が太陽・月の近くに見えたということからして BC1223 年 3 月 5 日の日食と思われます。この時ウガリッドでは皆既日食は見られませんが、大日食であったことは事実です（図 4）。



ギリシア中東で有名な日食の例は

メソポタミアにあったメディア国が今のトルコにあったリュディア国と戦闘中に日食が発生し，恐れおののいた両軍は講和を結んだ。これは BC585 年 5 月 28 日の日食であり，実はタレス（BC624 年 － BC546 年頃）が予言していた。

というものです。この話はヘロドトス（BC485 年頃－BC420）の『歴史』に書かれています。彼は「歴史の父」とも呼ばれていますが，脚色捏造も多いそうです（図 5）。

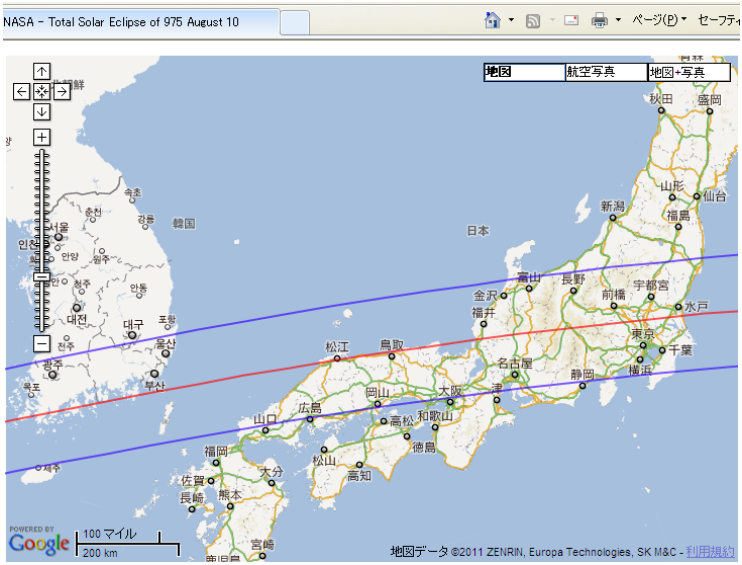


日本では

わが国最初の日食記録は 628 年『日本書紀』に載っていてそれについては別途詳説します。『続日本紀』には多数の日食記事がありますが，部分食がほとんどで中には実際に起らなかったものもあります。最初の皆既日食記録は平安時代で，歴史書『日本紀略』によると，圓融天皇の時代、天延三年七月一日（＝975 年 8 月 10 日）のことで，予報は部分食でしたが「**如墨色無光、群鳥飛亂，衆星盡見**」だったと書かれています。鳥が群がって飛び乱れ，たくさんの星が見えたとは当時の都人はびっくりしたことでしょう。朝廷ではこのために大赦を行いました。当時は安倍晴明が天文博士の任にあって活躍していたころですから，この文章はきっと彼の部署で書かれたものでしょう。陰

天延三年七月一日辛未、日有レ蝕、十五分之十一、或云皆既、卯辰刻皆虧、如二墨色一無レ光、群鳥飛亂、衆星盡見、詔書大二赦天下一、大辟以下常赦所レ不レ免者咸赦除、依二日蝕之變一也、八月廿七日丙寅、

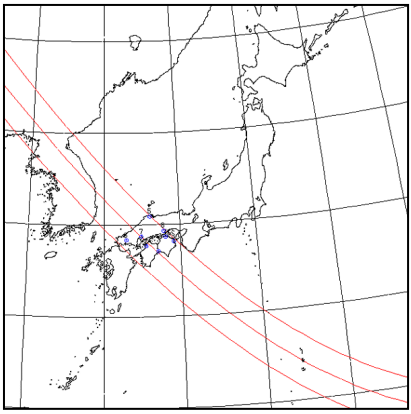
陽師とは妖しげな占師や超能力者ではなく，天文現象を観測記録していた専門技術者なのです。皆既日食はこの時までに何回か起こっているはずですが、実際に記録が残っているのはこの時が初めてです。



このときの皆既帯は本州の広い範囲にわたり（図６）、西は中国、東はハワイまで伸びています。京都では 6 時 52 分に始り、7 時 55 分～58 分の間皆既が見られたはずです。

源平合戦と日食

源平合戦のひとつ、水島の海戦は珍しく平氏が勝ちました。時は寿永二年閏十月一日(＝1183 年 11 月 17 日)、場所は岡山県倉敷市水島、今は工業地帯となっています。都落ちした平氏は再起を狙って源氏の兵を迎え撃ちます。戦い中に日食が起ったため、それまで優位に立っていた源氏側が驚きのあまり逃げ出したという話が『源平盛衰記』巻三十三にあるそうです。平家方は予め日食のあることを知っていたが、源氏方（実は無学な木曽義仲の兵）は知らなかったのでびっくりしたのでしょう。「**天俄かに曇りて日の光見えず**」と記されていますが、金環食だから真っ暗にはならなかったはずです。義仲は京へ逃げ帰り、この後、急速に低落していきます。この時の金環食は山陰山陽四国で観られ、京都では部分食でも 9 割以上欠けたはずです（図 7）。



本能寺の変と日食

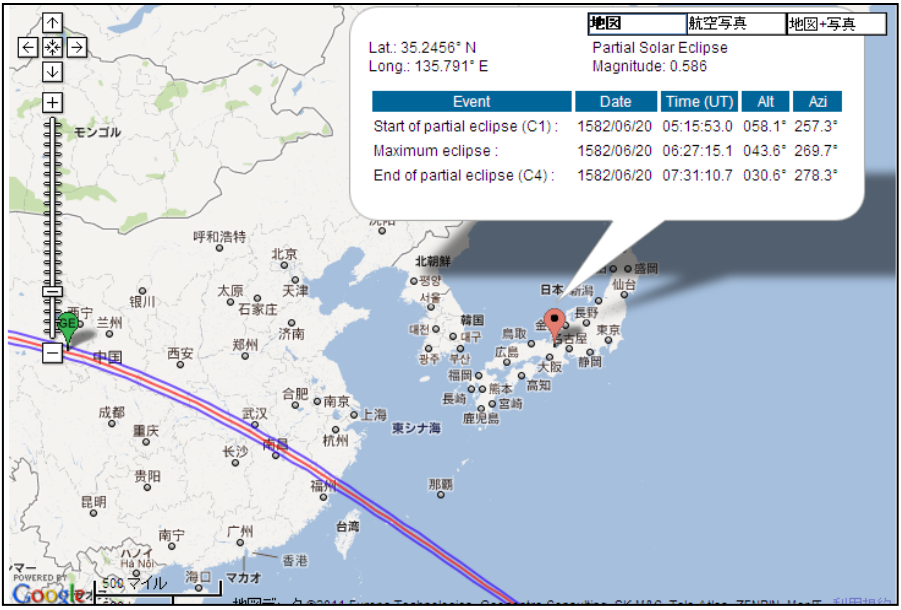
本能寺の変は天正十年（1582 年）六月二日の早朝，実はこの暦日は旧暦で，前日は一日、新月です。ひょっとしたら？そう実は日食があったのです。皆既ゾーンはアラビア半島～北インド～中国南部～太平洋を走り，石垣島なら皆既が見られたかも知れませんが，京都では約 6 割欠ける部分食でした（）。15 時半ころ見えたはずですが，日食の記録はない！ある公家の日記によると，この日は雨（6 月 21 日、梅雨のさなかですね）で夜になってから晴れたそうです。ところが『天正十年具注暦』なるものには，ちゃんとこの日の日食が予告されているそうで，この暦は朝廷の陰陽師が細々と作っていたものらしいです。だから日食を知っていた公家もいたはずです。そして中国出陣を延期するよう信長にアドバイスした公家もいたでしょう。信長が京都に来たのは明智光秀を従えて，毛利攻めに出発する

ためだったのです。しかし迷信嫌いな信長のこと，たとえ日食を見ても人の忠告など聞かなかったでしょうね。実はこの頃信長は朝廷に改暦を迫り、暦作りや改元の権限を取り上げようとして、公家・陰陽師と争っていたが、彼の死ですべて中止になったそうです。

公家の日記や宣教師の書簡によると、この年，天正十年の前半には天下大乱を想わせる数多くの天変が起こっています。

・二月には京都でも安土でもオーロラが見えたという記録があります。

・四月には大彗星が現れました。その記録は中国やヨーロッパにもあり，特にティコブラーエが観測しています。彼は最後最大の眼視観測者で視力は 3.0（？），彗星は気象現象ではなく天体であることを明言した人です（中国では紀元前から知られていました）。

・四月末五月初には大流星火球の落下

・六月には日食，しかし本能寺の変の後には天変はないようです。